

## カヌー競技先進国としてのハンガリーにおけるスポーツシステム および競技の実態に関する視察調査

栗本宣和

### A report on system and development about canoe sports in Hungary

KURIMOTO Nobukazu

#### 1. はじめに

2010 (H.22) 年 2 月 27 日 (土) から 3 月 16 日 (火) の 18 日間の日程で、カヌー先進国としての組織体制や強化手法ならびに指導者制度を視察することを目的としてハンガリー共和国 (以下ハンガリー) を訪問する機会を得た (表 1)。

ハンガリーは、オリンピック大会カヌー競技スプリントにおいて、ベルリン大会 (1932) から北京大会 (2008) まで、計 17 大会連続で 3 位以上の入賞を果たしており、今日までのメダル獲得数が世界第一位のカヌー強豪国である。また、首都ブダペストにあるセンメルweis 大学 (Semmelweis University) は、国際オリンピック委員会から公式のコーチ養成機関 (ICC: International Coaching Course) として認定されている二つの大学のうちの一つであり、カ

ヌーに関する競技力向上とコーチ認定制度の観点を中心として、同国におけるスポーツシステムのモデルとして視察を行なった。

#### 2. ハンガリーにおける視察

ハンガリーへの渡航に際して、日本カヌー連盟専務理事であり国際カヌー連盟 (ICF) 第三副会長である成田昌憲氏にお願いをし、ハンガリー代表としてモスクワ五輪の覇者であり、ICF 第 1 副会長のヴァスクチ (István VASKUTI) 氏に事前連絡をして頂いた。滞在期間と、渡航の目的を伝えたところ、ハンガリーのカヌー & カヤック連盟 (以下ハンガリー連盟) の事務局が訪問プランを作成し、スケジュールと宿泊、それに移動に関わる交通手段を手配してくれたので、大変助かった。ハンガリーではブダペストを拠点としてジュール、ソルノックの 3 都市に滞在し、ハンガリー連盟と、5 つのクラブチーム、センメルweis 大学、それにスポーツ学校を訪問した。

表 1 ハンガリー視察調査行程

日付	行 程	宿泊地
2月27日	成田発 (13:40) ミラノ経由 ハンガリー着 (22:00)	
2月28日	ブダペスト市内研修	Hotel
3月1日	ハンガリーカヌー連盟訪問	
3月2日	スポーツ博物館見学 タ刻ジュールへ移動	
~7日	ジュール市クラブ視察 " 市内研修 タ刻ブダペストへ移動	クラブハウス
8日~ 11日	ブダペスト市クラブ視察 センメルweis 大学訪問	Hotel
12日~	ソルノック市へ移動 ゲザ氏訪問 " クラブ視察 水球の試合観戦 " スポーツ学校視察	トレーニングセンター
15日	" 市内研修 ブダペストへ移動	Hotel
3月16日	ハンガリー発 (17:55) ローマ経由 チュニジアへ移動	

#### 1) ハンガリーカヌー & カヤック連盟について

ハンガリーに到着した翌々日 (3/1) に、ドナウ川沿いに立地しているハンガリー連盟を訪問し、目に飛び込んできたのが、ミーティングルームの壁に掲げられたポスターに描かれている大手企業スポンサーのロゴの数であった。そこで、ヴァスクチ氏からハンガリーにおけるカヌーの実情を伺った。ハンガリー連盟が統轄しているカヌーの種目は、スプリントとマラソン、ドラゴンカヌー、スラローム、それにカヌーポ

ロで、オリンピック実施種目であるスプリントとスラロームのうち、国土の地形が起伏に富んでいないため、スラロームはあまり盛んではないとのことであった。マラソンは、世界チャンピオンも輩出しており、ドラゴンカヌーと同様に国際大会を開催している。国内には、約80のクラブチームが存在し、そのうち12のクラブが首都ブダペストにあるとのことである。事務局は、各種目と部門ごとに分かれた部署に職員がおり、訪れた折にもおよそ20名のスタッフが勤務していた。強化体制については、10～12歳がkids、13～14歳がchildren、15～16歳がcadet、17～18歳がjunior、19歳～seniorと2歳ごとに区分けされており、そのカテゴリー内で試合が行なわれている。カヌー選手の80%は、13歳までにカヌーを乗りはじめており、2,000～4,000mの試合を目標に、スローレートで持久力を養わせる過程において、同時にテクニックの修正や改善を行なわせている。バランス感覚が最も養われるこの時に、バランスの良いスモールサイズボート（slow boat）を用いて、正しいテクニックの定着を図るそうである。そして、childrenやcadetの年代では、4,000mの試合で高い持久力と、1,000mでハイスピードを養わせ、cadetにおいては身体の成長度合いにあった艇を用いている。またペアやフォアといったチーム種目のトレーニングを始める時期でもあり、次のjunior期には6,000mやオリンピックの開催距離である1,000mや500mと、200mのような短距離も徐々にこなっており、次のsenior期に繋がる強化をする狙いがある。弱年齢の時期に持久力強化および正しいテクニックとバランス感覚の定着を図り、年齢と共にカテゴリーが上がるにつれて、レースの距離も短くしていくことでスピード強化をしていくことを狙いとしている。またそれとは別に、全カテゴリーを通して、長距離のマラソンレースを実施している（ex.Junior: 23 km, cadet: 10 km, kids: 6 km）。加えて、ハンガリー、スロバキア、ポーランド、チェコの隣国4ヶ国において15～17歳を対象にした「Olympic Hopes」という大会を持ち回りで開催しており、この年代より国際競技力の習得を目指している。seniorのナショナルチームメンバーは二度の選考会で、男子のカヤックとカナディアンでそれ

ぞれ12名、および女子カヤック12名の計36名が選抜される。二度の選考会において、一勝一敗となり勝者が2名になった場合は、一騎討ちの勝負で決めるという大変シンプルな方法で行なわれている。ハンガリー代表選手になると、スポンサーからの寄付や政府からの支援で生活費を賄えるため、他に働くことはない。指導者は、ハンガリー国内に指導者資格を持ったコーチが184名登録されており、その内ナショナルチームの10名を含む40～50名がプロのコーチで、それ以外はパートタイム、もしくはボランティアである。コーチの資格を取得するには、4～6年間大学に通い、年数に応じた異なるランクの資格が授与される。「指導場面において利用する教本のような共通テキストは、ハンガリー連盟に存在するのか?」と質問をしたところ、「指導者は養成機関で徹底して教えられることで、共通認識のもとにコーチングがなされており、パイプルのようなものは、指導現場に必要なはない。」とのことであった。このような組織、選手、指導者にわたるピラミッドシステムが、ハンガリー連盟を中心に、国内全域に構築されている。

## 2) クラブチーム

ハンガリー国内において、ブダペストで3つ、ジュールとソルノックでそれぞれ1つずつの計5クラブを訪問し、主に指導現場の実情について、各クラブを視察させてもらった。特にジュールでは、クラブハウスに宿泊をし、コーチ陣と寝食をともにした5日間において、時にトレーニングに加わり体験もさせてもらった。それぞれクラブのロケーションや規模による違いや、問題点もあるようだが、ここでは各クラブに共通することを以下に紹介することとする。まずどこのクラブにおいても目にする光景が、小学生から年配のご老人まで幅広い年齢層のメンバーが、同じ場でカヌーを楽しんでいることである。クラブ内にそれぞれ、年齢、性別、種目によって各チームに分かれており、それぞれに担当コーチが存在していた。そのため、コーチへの給料や、クラブの運営は、政府とハンガリー連盟、クラブ員の会費、それにスポンサーからの寄付によって賄われていた。ハンガリーにおけるカヌーのシーズンは、3月中

旬から9月中旬までの約6ヶ月で、その後10月末までを完全オフもしくは個人練習期間ということで、チーム練習は特に行わず、11～2月の4ヶ月間をオフシーズンのトレーニングとして、ウェイトトレーニング（13歳までは重りを使用せず自重を用いる）、ランニングをメインプログラムに、2日ないし3日に一度の頻度でスイミングを2,000～4,000m行なうのと、どのクラブも所有しているパドリングタンク（室内での練習水槽）におけるテクニク習得と体力強化を行なっている（図1）。訪問した時期は、雪解け水のため大河ドナウ川の流れが速いこと、寒さ、降雪の関係で、陸上でのトレーニングが殆どであったが、ジュールでは唯一水上トレーニングにも同行させてもらった。内容としては、川の流れに逆らうように上流に向かって10km程度漕ぎ上がり、帰りは川の流れに乗って比較的早く下るスピードメニューをこなしていた。他には、クロスカントリースキーを行なうために、オーストリアへも行くそうである。senior チームは学校を欠席する問題がないため、イタリア、スペイン、トルコ、南アフリカなど比較的暖かい地方にトレーニングキャンプに行き、乗艇練習を行なっていた。

コーチ陣の中に、筆者が高校生の時、日本で開催された世界ジュニア選手権にともに出場していたことで親近感が沸き、気軽に質問などに答えてくれたりもした。このことは、当時ハンガリー代表として活躍していた選手達が、30歳代になりチームの中核を担うコーチとなっていることも意味している。ある雪がしんと

降る日に時間が生まれたので、事前交渉なしに1つのクラブを訪問した。そしたらコーチが、「じゃあ、早く着替えてこいよ！」とすぐに私を受け入れてくれた。その翌日も同じクラブを訪ね親密になったところで、その理由を聞いたところ、「ハンガリーは、他国の選手やコーチに対して、包み隠すことなく全て教えるんだ。現に北京五輪の直前に、外国の選手を受け入れ合同練習をしたら、その選手がハンガリーの選手に勝ってメダルを取った。でも、それはハンガリーの功績ということで問題ないことなんだ。」と大変寛容だった。世界最強国ということで以前は敷居が高いイメージ感覚があったが、どのチームにおいても資料を提供してくれるなど、大変親切に接してもらえたことはありがたく、今でも情報を送ってきてくれている。

### 3) センメルweis 大学 (Semmelweis University)

医学部が有名であるが、スポーツ分野においても大学関係者でオリンピックの金メダリストを、延べ88名輩出している大学である。この大学のスポーツ学部長であり、筑波大学に研究員として在籍（'91～'95）した経歴をお持ちのゾルタン・ラダック（Zsolt Radák）教授を訪問した（図2）。大学の講義ではトレーニング理論を担当し、研究分野のご専門は、活性酸素と加齢についてで、九州大学や防衛大学をはじめとする日本の大学と共同研究を行なったりされている。大学としては、日本の大学と人事交流をするなど協定を締結している。現在、スポー



図1 パドリングタンクと練習風景

ツ学部には教員 105 名、学生約 2 千人が在籍しており、International Congress on Sport Science for Students (ICSSS) を主催したりしている。ラダック氏に、「なぜハンガリーは、スポーツが強いのか?」と質問をしたところ、「指導者に対して指導者養成を行なっており、指導者育成が行き届いているからだ。日本の教員免許制度のようにね。」と答えた。補足であるが、各クラブチームのコーチに、どこでコーチ資格を取得したのかを聞くと、「センメルweis 大学だよ。」と全員が答えた。

続いて International Coaching Course (ICC) を管轄する部署を尋ねて、ディレクターのコスラ (Tibor Kozslla) 教授より、ICC に関する情報収集を行なった内容を、以下にまとめる。現在は、主に屋外競技を 4 月、屋内競技を 9 月として年 2 回開催され、期間はそれぞれ 3 ヶ月間である。講義に用いられる言語は英語で、大学内の教員スタッフと外部講師、それに各コース別に特化した競技の専門家が講師を務めている。全カリキュラムを修了した者には、IOC より認定証が授与される。今後は、期間を 10 週間に短縮し、また始めと終わりのみ現地ブダペストで講義を受け、それ以外は各参加者の自宅で学習できるシステムを現在考案中で、長期間拘束されることなく、より多くの人が受講しやすくする予定である。ICC の事務局スタッフは 10 名で取り回しを行なっていた。ICC の説明を伺った後、そのスタッフの 1 人が、学内の体育施設を全て案内してくれた。



図 2 ラダック教授 (右) と筆者

#### 4) ソルノック市スポーツ学校 (Szolnok Sports School)

ソルノック市へは、筆者が 1994 年から 5 年間指導を仰いだハンガリー人コーチのゲザ (Várkonyi Géza) 氏と 12 年ぶりの再会を果たすために訪問地とした。そのゲザ氏の取り計らいにより、1993 年に設立されたスポーツ学校 (以下スポーツスクール) を表敬訪問することとなった (図 1 パドリングタンク)。午前中に通常の学校 (以下学校) へ通学した子供たちが、午後からスポーツスクールに 1,000 人通ってくる。サポート競技は、カヌー & カヤック、サッカー、柔道、水泳、フェンシング、アルティメット、バレーボール、バスケットボールの 8 競技で、カヌーに関しては、9 ~ 14 歳の子供たちをサポートしている。指導者は、専任が 12 名でパートタイムが 31 名の計 43 名で指導にあたっているが、もちろん全員指導者資格を持ったコーチばかりである。教育的視点も必要となるため、学校の先生もスタッフのメンバーに加わっている。このうちカヌーの指導者が 6 名で、地元のクラブチームと学校との 3 者が連携を図ることで、より効果的な指導と、大会参加により学校を欠席する場合に公欠措置をとるなど、より合理的なはからいがなされていた。運営資金は、ソルノック市が 70% を出資しており、他は生徒の保護者の負担と、大会の成績に応じた補助金で賄っており、このようなシステムは、ハンガリー国内においても珍しい取り組みだそうだ。

この訪問に際し、日本から視察に来たとい



図 3 スポーツスクール校長 (左) とゲザ氏 (右) と筆者

うことで、会談の様様を地元ソルノック TV が取材しに駆けつけた ([http://www.szolnoktv.hu/musorok/szolnoksport/?article\\_hid=8787](http://www.szolnoktv.hu/musorok/szolnoksport/?article_hid=8787) 18 分 12 秒～)。また、当市と山形県遊佐市とが姉妹都市提携を結んでいる関係で、ハンガリー日本友好協会の会長と通訳も同席され、スポーツスクール訪問後に地元博物館を案内していただき、会食の席を設けていただく等の熱い歓迎を受けた。

### 3. 終わりに

カヌーの世界最強国に君臨しているハンガリーの様子について、これまでは筆者のカヌー体験におけるハンガリー人コーチからの学びであったり、国際大会等の場で感じ取った感覚的経験でしかなかった。しかし今回ハンガリーへ視察訪問したことによって、本場の状況や様子、肌で感じる雰囲気などを自身で直接感じ取るこ

とができた。そして何よりも伝わってきたことが、ハンガリーの皆さんの親切さ、温かみ、優しさであった。我々、日本人と同じアジアの血統を引くといわれるハンガリー人（マジャール民族）は、蒙古斑があったり、氏名を苗字・名前の順で書いたりと親近感が湧くところも多々あり、ぜひ日本のカヌー競技力がハンガリーに追いつき、そして追い越せるよう、本視察の内容を日本の指導現場にフィードバックしていきたいと思う。ハンガリーのコーチが口々に言っていたが、「今度は、水上トレーニングをメインで行なっている夏に来いよ。」という言葉通り、夏にハンガリーを訪れて更なる見聞を深めたいと思う。

※本視察調査は、第 23 回筑波大学河本体育科学研究奨励賞の研究奨励金によるものである。